

忙中閑話

国立長寿医療研究センター
臨床検査部長
徳田 治彦

私が臨床検査部を担当するようになって、15年あまりが過ぎましたが、着任当初から欠かさず続けていることに、朝のミーティングがあります。始業前の5分間ほど、採血担当を除く出勤者が参加し、技師長から前日待機職員への労いの言葉に続いて、出務状況、当日待機者の確認、シフトの変更など日常業務の連絡事項、非常事態への対処状況などが確認されます。次に、職員の1人が自由に話題を提供しますが、そこではトラベル、スイーツ、スポーツ、部活から暮らしの工夫など、本当に様々な話題が個性豊かに語られ、いつも感心しています。こうしてお互いに笑顔を確認して、私たちの一日が始まります。着任前に部外者の立場から見た検査部門は、高い技能を持った「匠」たちが個々に始業し、一日中ほとんど顔を合わすことなく終業・帰宅してしまう印象があったため、長寿医療研究を追求するナショナルセンター（NC）のミッションを共有する、チームの一員としての意識が何よりも大切と考えて始めたルーチンでした。今日、ISO15189の取得を目指して一丸となって取り組む様子を目にするにつけ、メンバーは年々変わりますが本当に頼もしいチームになったと感じています。

NCの検査技師は、国立病院機構（NHO）職員として転勤が避けられません。当初は、熟練者の流出にもどかしい思いをしたものですが、現在では組織の活性化に欠かせない制度とっております。昇進して再びご縁のあったケースも経験することができました。また、転勤をポジティブに捉えることのできた技師長などベテラン技師から、その醍醐味を伝授された若手には、冗談ながら地方厚生局管内の全県制覇を口にする頼もしい人もいました。若いうちにNHO職員ならではの得難い経験をして、大いに飛躍して欲しいと思います。

Artificial Intelligence（AI）の進歩は目覚ましく、近い将来、医療においても革命的な変化が起こると考えられます。これからの臨床検査において大切なことは、AIの活用で不確実性の最小化と安全性の最大化を図ること、そして人間性の回帰を追求することであろうと思います。「惜しみなく愛は奪ふ」（有島武郎）と言いますが、「AIに奪われる」のではなく、「AIを育む」ことで、「早く、正確な、優（易）しい」検査を、「チーム」のメンバーとともに希求したいと思います。